北海道上川郡上川町

越路34線遺跡

1978年

上川町公民館図書室
0010094670

上川町教育委員会

上川町公民館図書室蔵書

北海道上川郡上川町

越路３４線遺跡

１９７８年

上川町教育委員会

序　　　　文

上川町の先史文化の研究は、「上川町史」の先史編の中でふれられていて、その編年は旧石器文化の時代に位置づけされており、開拓以来現在迄町内各地から発見される遺物からは、土器文化時代の存在を立証するものは一点も発見されないまま今日に至った。

昭和51年の春、佐藤吉弘氏によって、この先史の土器文化の存在を示す重要な手がかりが発見された。一片の石としか思えない遺物を、それと気づき連絡をくださった氏の高眼に心からの敬意を表するものである。

この貴重な発見を契機に、土器文化時代の解明にのりだすべく、上川町埋蔵文化財調査会が結成され、この遺跡を越路34線遺跡と命名した。この遺跡のある越路地区は、上川町で最も初期に開拓された地域である。このことは明治初期すでに越路地区を経て越路峠に至り、北見方面にぬける通路があり多くの人々が、この地区を訪れていたことからも当然のことと考えられる。先史時代にはここを流れるエチャナンケップ川、越路峠付近一帯は、漁狩の場としてその餌物の豊富だったことが推定される。現に町内で最も近年までサケ、マスのそ上が見られた河川であり、現在でもウグイ、アメマス、イワナの豊富な川である。また毎年のように何度かエゾシカ、ヒグマの通過する地点であり、ノウサギ、キタキツネは常に居る場所でもある。先史時代には、おそらくこの豊富な食糧ときびしい自然条件の中で生活を営み続けていたと思われる。このことからもこの遺跡の研究は充分な価値のあるものと考えられる。

これら先史文化の探究は、先人から現在に至る歴史の変遷を知るうえで重要な位置づけがなされ遺跡から発見された石器・土器等の遺物をとおして郷土の先史の人々の生活のようすが想像される。

今回の発掘調査とこの資料が、考古学研究に、郷土文化向上、郷土愛の高揚に役立つことを期待するものである。

終わりに、本調査に当り終始多くの御指導御助言を賜りました斉藤　傑学芸員に深甚の謝意を表わします。また直接、発見企画調査研究と日夜深更まで研究努力を重ねて今日に至った上川町埋蔵文化財調査会のメンバー各位に心からその労をねぎらい今後益々の活動を期待して序文とする。

昭和52年11月

上川町教育委員会
教育長　河　本　芳　実

発刊にあたって

開基82年の上川町（明治28年、本田喜市氏入植を起原として）更にこれをさかのぼって人跡をたどれば、彼の松田市太郎幕吏のイシカリ川水源見分に至るが、これとて漸く120年前のことである。これは幕命による大探検であったが、町域内石狩川の水源をきわめたものであって、和人足跡の最古のものである。もとより先住者アイヌの足跡は、これよりも更に昔に遡ることは当然のことであるが、この民族の文字のないことに原因して、往古記録は全く尋ねようもない。必ずやその足跡は、町域内奥地にもあったことであろうが、今日では、ただ推定する以外にない。恐らく徳川期を越えるものがあったであろう。

道央内陸の奥地としての上川町。そこに往古いかなる人跡があったであろうか。このことは上川町郷土人として何人も知りたいところである。

今回、上川町埋蔵文化財調査会編さんによる、本「上川町越路34線遺跡」の発掘報告書が、上川町教育委員会の画期的な英断により刊行されるに至った。これには更に町理事者の格別の厚配を受けている次第であるが、郷土文化進展の為に誠に喜ぶべきことであって、町内大方の各位と共に慶祝して止まない次第である。調査会陣容は、つとに町内の恵まれた自然界に科学的なメスを入れている上川町自然科学研究会を主軸として、上川町郷土研究会が協賛して成るものである。そうして調査会最初の、その上、土器文化の解明という本町にとっては、まさに記録的な刊行であって、世に問うてそのひ益するところ頗る大なるものがありと信ずるものである。先きに昭和84年、江差牛石器文化が、安足間文化協会（会長小山康三氏）の手によって「江差牛」遺跡報告書として刊行されているが、本町城内古代先史の解明として、石器・土器両文化の双璧となるものである。

今回の刊行によって、道央内陸の地、上川町城内の先史文化の一部が解明され、更に今後、この方面の探究調査が、重ねられる契機ともなれば、悠久過去への思慕愛着もまた一段と濃厚となることであろうが、特に青少年層のこれへの関心を強く望んでやまない次第である。

昭和52年11月

上川町埋蔵文化財調査会
会長　都竹一衛

例　　言

1. 本書は、昭和52年4月29日から5月1日まで行なわれた上川町越路34線遺跡の発掘調査報告である。
2. 本調査は、上川町教育委員会の責任において実施した。
3. 本調査は、上川町教育委員会の依頼により、旭川市教育委員会の斉藤傑が担当した。
4. 発掘調査、遺物の整理は、上川町教育委員会より依頼を受けた上川町埋蔵文化財調査会の会員が協力して行なった。
5. 本書の執筆は、上川町埋蔵文化財調査会の会員合議の上で、第1章、第2章を成田新太郎、第3章を中条良作・福田和民、第4章、第5章を中谷良弘、第6章を斉藤傑がそれぞれ分担執筆した。
6. 挿図は、中谷良弘が、写真は、成田新太郎が主として担当した。

凡　　例

1. 遺物は、少ない数量の中から代表的なものを選び説明を加えた。
2. 挿図の縮尺は、図のなかに示した。
3. 写真は、原則的には挿図に順じた。

目　　次

序　文
　　上川町教育委員会教育長　河本芳実 ………… 1
発刊にあたって
　　上川町埋蔵文化財調査会会長　都竹一衛 ………… 2

第1章　越路34線遺跡の名称及び位置の概要 ………… 7

第2章　越路34線遺跡調査に至る経過 ………… 9
　1. 概　　要
　2. 調査略年譜
　3. 調査の動機
　4. 調査会の組織

第3章　越路34線遺跡発掘調査の経過 ………… 12

第4章　越路34線遺跡発掘調査の成果 ………… 14
　1. 発掘区の設定
　2. 層　　位
　3. 遺構・遺物
　　(1) 土　器
　　(2) 石　器
　　(3) その他の遺物

第5章　越路34線遺跡発掘調査のまとめ ………… 27

第6章　越路34線遺跡の編年上の位置づけ ………… 28

おわりに

図　目　次

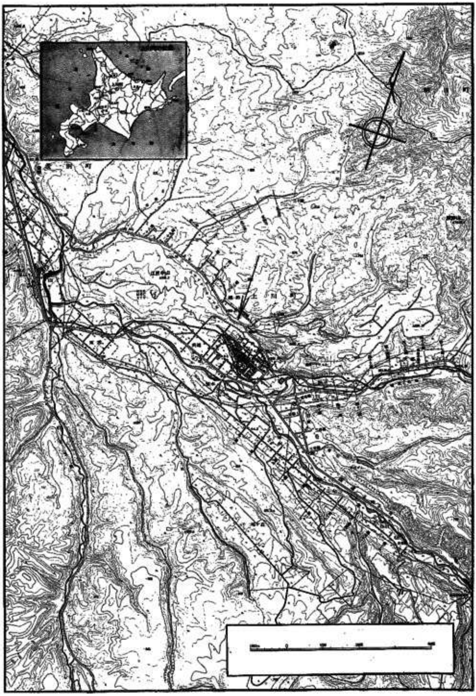
第 1 図　越路34線遺跡付近地形図 6
第 2 図　越路34線遺跡付近要図 8
第 3 図　上川町内の遺跡分布図 9
第 4 図　越路34線遺跡発掘計画図 14
第 5 図　越路34線遺跡発掘区A－B、C－D断面 15
第 6 図　越路34線遺跡出土土器の分布 16
第 7 図　越路34線遺跡出土深鉢形土器実測図 17
第 8 図　越路34線遺跡出土舟形土器実測図 18
第 9 図　越路34線遺跡出土土器拓本 19
第 10 図　越路34線遺跡出土石器・剝片の分布 21
第 11 図　越路34線遺跡出土石器実測図Ⅰ 22
第 12 図　越路34線遺跡出土石器実測図Ⅱ 23
第 13 図　越路34線遺跡出土炭化木片・骨片の分布 26

表　目　次

第 1 表　越路34線遺跡発掘区出土遺物一覧 13
第 2 表　越路34線遺跡出土石器一覧 24
第 3 表　越路34線遺跡出土剝片の分類 25
第 4 表　縄文時代晩期の編年表 28

図 版 目 次

第1図版　越路34線遺跡付近の航空写真・越路34線遺跡の遠景
第2図版　越路34線遺跡の発掘光景及びトレンチ光景
第3図版　越路34線遺跡土層断面及び土器出土状況
第4図版　越路34線遺跡石器出土状況
第5図版　越路34線遺跡出土深鉢形土器
第6図版　越路34線遺跡出土舟形土器
第7図版　越路34線遺跡出土土器
第8図版　越路34線遺跡出土石器Ⅰ
第9図版　越路34線遺跡出土石器Ⅱ
第10図版　越路34線遺跡出土剝片接合資料
第11図版　越路34線遺跡出土炭化木片・骨片



第１図　越路３４線遺跡付近地形図（矢印は遺跡の所在を示す）
５万分の１「上川町管内図」より

第１章　越路34線遺跡の名称及び位置の概要

本遺跡は、上川町で始めて土器が発見された場所で、遺跡の北側を通る34線道路にちなんで「越路34線遺跡」と名づけた。また、この遺跡は、土地所有者・佐藤吉弘氏が昭和50年10月農作物の収穫時に土器片を発見したことによって判明したものである。

遺跡の位置は、おおよそ東経 142度46分、北緯43度50分、最近標高基準点 350.97ｍの東南東約800ｍ、石北線上川駅より北北西約 1.5 Kmの地点である。行政区画では、上川郡上川町越路 286番地である。

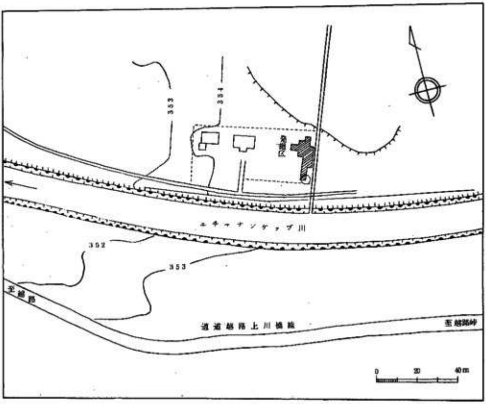
越路地区の基盤は、先白亜紀の粘板岩でその上に不整合に第四紀熔結凝灰岩が発達している。ここをエチャナンケップ川が東西に流れており、この川の右岸は後背地（北側）からの崖錐堆積物、さらに低位の河成段丘あるいは沖積世堆積物が発達している。河成段丘は２〜３段になり、下位に砂礫層、一部に粘土層や泥炭層の見られる地層である。遺跡は、エチャナンケップ川右岸の最低位の段丘面上にある。

越路地区の地形は、上川町の北西に位置し東から滝上町、朝日町、愛別町と接する町界線に並ぶ1000ｍ前後の山々に北面をさえぎられ、南面は摺鉢山（1026.3ｍ）の南西の山すそが続く丘陵帯（500〜600ｍ）があり、これが上川町市街地を分ける越路峠（393.3ｍ）から西方に山々が連なり最高峰は江差牛山（598.2ｍ）で西方に伸び石狩川沿にある円山（452.8ｍ）で終わる。南北の両側を山で囲まれた東西に細長く、エチャナンケップ川の右岸を主として開拓された農村である。

この地区は、明治28年上川町の入植第１号を記している所で、町内では最も早く開拓された地帯である。これは、開拓以前に幕末、明治初年代各種の踏査が行なわれ、この地区を通過した史実が示すように、北見方面にぬける通路として多くの人々に知られていたためである。先住者のアイヌの人達は、石狩川をさかのぼり安足間周辺の石狩川の急流をさけ、エチャナンケップ川沿を選んでいた訳である。このことは、アイヌ語の地名からも充分推量できる。安足間（andara−oma）・淵の所、江差牛（esaushi）・山が川岸までせまっている所をさけ、エチャナンケップ川（ichanankep）・鱒の堀りある川・に食糧を求め、越路峠に立って、大雪山（notakam−ushpe）を遠望し、ルベシベ（rupeshpe）・現上川市街・山越えの入口・のあるところに下り、ルベシベ川を上り北見国へぬけたものである。現に駅逓所のあとは、この通路沿に建てられ史実に越路ルベシベを経て中越駅逓（ルベシベ川沿で現中越駅付近）に至り北見にぬけたと記されている。

ichanankep・鱒の堀のある所であるエチャナンケップ川は、その名の示す如く戦前〜昭和20年代後半まで数多くのサケ、マスのそ上があった。また昭和45年までは、イトウの産卵そ上が数多く確認できた。しかし、その後の河川改修その他の工事で現在はまったく見ることができない。

エチャナンケップ川は、越路地区を東西に流れる約12Km程度の小河川で、摺鉢山を源とし南側の山波の直下を沿うように流れ石狩川にそそいでいる。おそらく先史時代、明治の開拓時代には、豊富な魚量をもち、これを求める先人達の生活も充分に予想されるところである。



第2図　越路84線遺跡付近要図（矢萩原図、中条改作）

越路地区には、これらを裏づけでもするかのように二つの遺跡が確認されている。そのひとつは江差牛遺跡で前述円山（452.8ｍ）の丘稜帯にある。この地点は、andara-oma，rupeshpe，さらにアイペッ（aipet）の各方面を一望にできる石狩川直上にあたる所である。また ichanankep は、石狩川の合流点から見渡せ南東に notakam－ushpe を目前にできる所でもある。ここは昭和34、35年に調査が行なわれ、多数の石器が発見され報告書も出されている。註1

また本遺跡の北北東約１Kmの地点には、越路藤田遺跡があり昭和35年に黒曜石の原石及び石器が数十点発見されている。また越路峠を経てルベシベ（上川市街）の東、石狩川とルベシベ川の合流点の河岸段丘からは数多くの旧石器が出土し現在も春耕後に石片を発見することがある日東遺跡がある。註2

このような環境の中で、土器の発見は先史時代の解明のためにも多くの意味をもつものと考える。とくに、越路峠直下のエチャナンケップ川右岸、それも現在の流れと100ｍとへだてない地点で発見されたことは、先史時代の解明のための手がかりとして重要であるといえよう。

第２章　越路34線遺跡調査に至る経過

１　概　　要

越路34線遺跡の地区は、上川町で最も早期に開拓された所である。上川町入地１号は、この地区の27線沢で明治28年であった。この年から続々と入植者があり、明治20年代には、すでに遺跡の周辺は開拓されていた。これより先、明治24年には、この越路地区に越路駅逓所が設けられ、町内の中越駅逓と結び、北見方面にぬける道路があった。さらに、さかのぼると、明治初期、幕末にかけての奥地の探検者は、現旭川市より、現愛別、安足間まで石狩川をのぼり、ここで石狩川の急流をさけ、左折して、エチャナンケップ川沿いの通路を利用し、越路峠に立って大雪を望み奥地に向ったことが、「上川町史」に記されている。[註3]従って、かなり早い時期からこのエチャナンケップ川沿いの通路は多くの人々に知られており、おそらく、先住のアイヌの人たちも数多く、この通路を用いたものと推定される。越路34線遺跡は、この通路沿いにあり、越路峠のすぐ下であることからも何らかの意味があるような気がする。

この遺跡の周辺は、戦前、戦後、数戸の農家があったが、昭和30年代後半から現在まで、離農が続き、休耕施策と相まって、現在では、佐藤吉弘氏宅一戸を残すのみとなった。離農、休耕前は、殆どが水田であったが、現在は休耕・転作の草地、及び若干の畑地となっている。

遺跡所在地の地主、佐藤吉弘氏は、昭和28年現在地に入地され、農業を主として米作を中心にされていたが、現在は休耕し、家の周囲を若干、野菜を耕作されている。そのかたわら、佐藤氏は、上川営林署職員として勤務されている。

昭和51年春、佐藤吉弘氏は、昨年耕作の長芋を収穫すべく作業をされていた。たまたま、黒曜石の石器のようなもの、土器片のようなものを発見され、不明のまま、成田（現調査会副会長）に連絡された。この発見によって縄文土器と推定され、発掘調査の契機となった訳である。

上川町では、これまで各地で石器が発見されていた。第３図は、石器が発見された遺跡の所在地を示したものである。これらの地点の主なものは石狩川流域の河成段丘上のメノコ沢遺跡、ルベシベ川と石狩川の合流点近くの河成段丘上にある日東遺跡、越路地区内には、藤田遺跡、江差牛遺跡がある。[註4]また、大正14年、塩谷忠等によって、2000ｍの高地である白雲岳、小泉岳で発見され、注目された石器、採集地がある。[註5]

これらの遺跡の内で、日東遺跡は昭和30年代から加藤銀市氏宅地で石器が多数発見され、800余点に達したと云われ、現在も畑地から黒曜石の石

第３図　上川郡上川町内遺跡の分布
（※印は遺跡を示す）

刃等が時々発見される。藤田遺跡は、昭和34～35年にかけ、土地の所有者、藤田忠逸氏が農耕中にたまたま発見したもので、黒曜石の原石を含む、石刃等80数点が採集されている。これらの一部は現在、層雲峡博物館に展示されている。また、石狩川を直下に見下す江差牛遺跡は、昭和34～35年にかけて安足間文化協会（代表小山康三氏）の手によって発掘され、報告書も出されている。このように町内各地に点在する遺跡からは、今回、越路34線遺跡で土器が発見されるまでは、石器類しか発見されておらず、土器のある時代の文化を立証するにたる遺跡を発見することができないまま今日に至った訳である。

この土器の発見によって、これまで上川町では土器文化時代のことは立証できないとあきらめていた私たちは、早速に、この遺跡の発掘調査および研究にのりだすべく活動を始め、今日の発掘に至った訳である。

2　調査略年譜

上川町での今日までの遺跡調査等を、「上川町史」から拾ってみると次のようになる。註6

大正初期	寺島孝儀氏、白川高台で石刃を発見
大正5年頃	菊地清蔵氏、清川メノコ沢遺跡で遺物を発見
大正14年	塩谷忠氏等、小泉岳、白雲岳で石器の散乱しているのを発見
昭和24年	菅原勝雄氏、江差牛遺跡より遺物を発見
昭和30年代	加藤銀市氏、日東遺跡で遺物を収集
昭和34年	江差牛遺跡を安足間文化協会が発掘調査
昭和35年	藤田忠逸氏、越路藤田遺跡で遺物を収集
昭和37～41年	都竹一衛氏、町史編さんのために遺物を調査
昭和51年5月	佐藤吉弘氏、所有地内より縄文土器を発見
昭和51年10月～	上川町教育委員会、発掘調査について関係機関と連絡調整
昭和52年3月	上川町埋蔵文化財調査会が発足、越路34線遺跡と命名。

3　調査の動機

(1) この遺跡は、土地所有者の佐藤吉弘氏の申し出の通り、春耕時、収穫時に包含遺物が著しく破壊され、特に今回の発掘場所は、長芋が栽培されているために遺跡全体が破壊されるおそれもあるところから、この破壊の進行せぬ前に調査を行ない遺跡及び遺物の正確な記録を残しておきたいと考えた。

(2) 上川町内において始めて縄文式土器を出土する遺跡が確認されたので、その遺跡の実態を調査によってあきらかにし、記録に残したいと考えた。

(3) 今までも、教育文化の発展向上を願う立場から、様々の活動を行っているが、今調査も郷土史研究、自然科学研究のグループの学習の場とするとともに、その成果を町民に公表し、教育活動の教材としたり、今後の研究の資料としたいと考えた。

4　調査会の組織

今回、越路34線遺跡を調査するにあたり、埋蔵文化財調査会を組織し、調査にあたった。

上川町埋蔵文化財調査会

顧　問	大方　春一	上川町長
	河本　芳実	上川町教育委員会教育長
	清野　善吉	上川町議会議長
会　長	都竹　一衛	上川町文化協会会長
副会長	成田新太郎	上川町自然科学研究会会長
担当者	斉藤　　傑	旭川市教育委員会
調査長	中谷　良弘	上川町自然科学研究会事務局長
調査員	中条　良作	上川町自然科学研究会員・郷土研究会員・郷土資料収集員
	盛　　久良	上川町自然科学研究会員・郷土資料収集員
	嘉屋　元一	同　上
	堀内　重夫	同　上
	保田　信紀	同　上
	佐藤　清吉	同　上
	水野　英正	上川町郷土研究会員・郷土資料収集員
	辻　　淳	同　上
	富塚　秀安	同　上
	中山　　修	同　上
	大西　幸雄	同　上
	原田　　豊	同　上
	福田　和民	同　上
	矢萩　峰司	上川町役場
事務局長	鈴木　文雄	上川町教育委員会社会教育課課長・公民館館長
事務局員	藤坂　孝一	上川町教育委員会社会教育課
	小野寺直樹	元上川町教育委員会社会教育課
	小西　峰夫	同　上　　社会教育主事 (現北海道教育庁上川教育局社会教育主事)

第３章　越路34線遺跡発掘調査の経過

４月４日（月）

午後１時30分　上川町福祉会館において、旭川より斉藤　傑学芸員を迎え発掘の事前学習を行なう。平日であるが会長以下15名の参加があった。

４月23日（土）　曇

融雪を促進するため、発掘予定地とその周囲を除雪する（午後１時～３時）

参加者：成田、中谷、鈴木、藤坂

４月28日（木）　曇後みぞれ（気温＋４℃）

・春耕・収穫期に於て遺物が破壊される恐れがあると申し出のあった地点を中心に、トレンチの大きさを縦横２ｍとし、東西に10ｍ、南北に22ｍを十字形に設定した。設定に先だち役場水道課の泉技師によって水準点を定め、この基準点を基に水平面を定めた。尚基準点はＢ11発掘区東南の隅とした。予定発掘区の面積は、60㎡である（午後２時～４時）

参加者：都竹、成田、中谷、藤坂、小野寺、泉、成田

・午後６時より福祉会館に於て最終打ち合わせを行なう。出席者12名。

４月29日（金）　曇り時々みぞれ（気温＋１℃）

河本教育長の参加を得て各発掘区に担当者を決め発掘作業を開始する。Ｂ２発掘区の南西隅から土器が押潰されたような状態でかたまって出土した。Ｂ３発掘区から土器片、石器が多く出土し、Ｂ４発掘区から石器及び剝片が多く出土した。Ｃ２、Ｃ４、Ａ４、Ａ５の各発掘区を拡張設定した（作業開始午前８時、終了午後５時）

見学者：樋口信夫氏、堀内夫人、小中学生５～６名。

参加者：都竹、成田、鈴木、藤坂、小野寺、中谷、中条、盛、嘉屋、堀内、保田、佐藤、水野、辻、原田、矢萩、河本、斉藤、小西夫妻。

４月30日（土）　曇り一時晴（気温＋５℃）

Ａ４、Ａ５、Ｂ１、Ｂ３、Ｂ４、Ｂ５、Ｃ２、Ｃ３、Ｃ４の各発掘区を掘り下げる。Ｃ３発掘区から骨片、クルミが出土した。またＡ４発掘区から土器片がかたまって出土した。前日に続いてＢ４発掘区から石器、剝片が多数出土した（作業開始午後１時、終了４時）

見学者：沢田町議、仲平文協事務局長、溝口氏、学生数人。

参加者：都竹、成田、鈴木、藤坂、小野寺、中谷、中条、盛、堀内、保田、佐藤、水野、原田、福田、矢萩。

５月１日（日）　曇後雨（気温０℃）

予定の発掘区全域を掘り下げる。Ａ３発掘区付近から土器片多数、Ｂ２発掘区から土器片及び剝片、Ｃ３発掘区から骨片及び木炭が出土する。東西、南北両方向における土層断面の観察記録後、発掘区全域の埋戻しをする（作業開始午前８時、終了午後１時30分）

参加者：都竹、成田、鈴木、藤坂、小野寺、中谷、中条、盛、嘉屋、堀内、保田、辻、福田、
　　　矢萩、斉藤。

5月7日（土）

福祉会館において発掘遺物の分類整理と水洗いを行なう。

参加者：都竹、成田、藤坂、中谷、中条、堀内、保田、辻。

5月22日（土）

遺物台帳を作成し、遺物に整理番号を記す。

参加者：成田、中谷、中条、佐藤、保田、藤坂、福田。

7月16日（土）

斉藤学芸員を講師に迎え遺物の実測、拓本、復元などの方法を学習する。

参加者：斉藤、成田、堀内、中谷、藤坂、佐藤。

8月26日（金）

調査報告書作成のための打ち合わせと執筆分担を決める。

参加者：都竹、鈴木、成田、中谷、堀内、保田、嘉屋、原田、佐藤（清）、辻、水野、藤坂、
　　　佐藤（吉）、矢萩、福田、小野寺。

11月末日　調査報告書の原稿集約。

発掘区	4月29日（第1日）					4月30日（第2日）					5月1日（第3日）					合計		
	掘深(cm)	遺物			担当者	掘深(cm)	遺物			担当者	掘深(cm)	遺物			担当者	土器	石器	その他
		土器	石器	その他			土器	石器	その他			土器	石器	その他				
A3	−45	7	2	1	堀内											7	2	1
A4	−35	14	1	1	原田											14	1	1
A5	−25	1			水野											1		
A6											表土	1			?	1		
A7											表土	2	2		?	2	2	
A8											表土	22	2	1	?	22	2	1
B1					小野寺	−45	4		2	小野寺						4		2
B2	−25	44	4	1	藤坂						下層土	3	6	2	藤坂	47	10	3
B3	−45	15	21	1	中条	−45		1	1	中条	−50	1			中条	16	22	2
B4	−30		32	2	盛	−50		10	1	嘉屋			45		盛		87	3
B5	−18	2	2		辻	−30	1		2	辻						3	2	2
B6	表土	1	1		原田											1	1	
B7	表土	2	1		嘉屋											2	1	
B8	表土	2	1		成田											2	1	
B9	表土	1	1		鈴木											1	1	
B10	−10			1	河本													1
B11	表土	2			都竹											2		
C2	表土		2		矢萩												2	
C3	−25	2	2		保田	−35	1			保田	−40			4	保田	3	2	4
C4	−12	1			鈴木				1	鈴木						1		1
D3	−30		7	7	佐藤清			16		佐藤清							23	7
E3	−15		4	1	佐藤清												4	1
合計		94	81	16			6	27	7			29	55	7		129	163	29

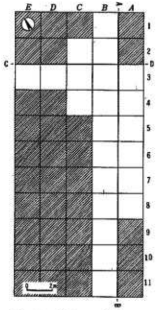
第1表　越路34線遺跡発掘区出土遺物一覧

第４章　越路34線遺跡発掘調査の成果

１　発掘区の設定

発掘区は、耕作中に遺物が掘り出された地点を中心にして、南北に22ｍ、東西に10ｍのトレンチを設定し、１区画を２×２ｍとし、北から南に、１、２、３……11、東から西に、Ａ、Ｂ、Ｃ…Ｅの記号を付した（第４図）。この発掘区に従うと耕作中に遺物が掘り出された場所は、Ｂ３の発掘区になる。

今回の調査では、Ａ３からＡ８、Ｂ１からＢ11、Ｃ２からＣ４、Ｄ３、Ｅ３の各発掘区を調査し、発掘総面積は88㎡となる。



第４図　越路３４線遺跡発掘計画図

２　層　　位

発掘区における土層断面の観察は、Ｂトレンチの東側の壁面と３トレンチの北側の壁面で行なった。その観察によると、堆積順序は上から第１層・黒褐色腐植土層、第２層・黄褐色土層、第３層・砂礫層となっている（第５図）。

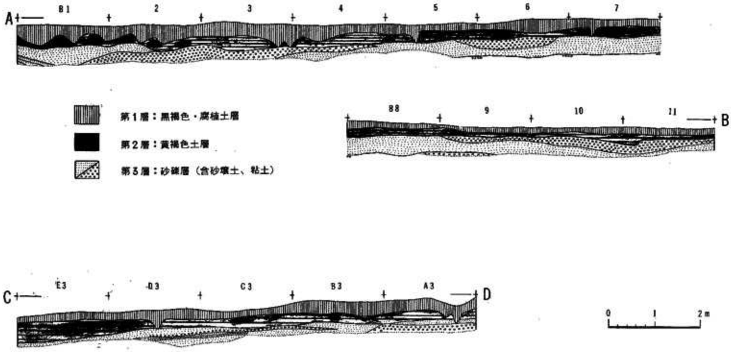
遺物は、第１層と第２層から出土したが、本来は第２層が包含層と思われるが、耕作等によって第２層わら遊離して第１層に包含されることになったと推定される。

第１層　黒褐色腐植土層

この層は、腐植含量の多い黒褐色土層で、耕作によって著しい攪乱を受けている。層厚は、薄いところで６～８cm（Ｂ８、Ｂ９、Ｂ10の各発掘区）、攪乱の著しいところで48cm、土層の比較的安定したところで28～30cmである。Ａ３、Ｂ１、Ｂ２、Ｂ３、Ｂ４の各発掘区では、この層と第２層の耕作による攪乱がとくに著しい。この層に包含される遺物は、第２層から削り取られて混入したものと推定される。

第２層　黄褐色土層

この層は、黄褐色土壌で構造が粒状を成し、その手ざわりがわずかに砂粒を感じさせる。この層中のところどころで植物遺痕を認めた。発掘区の西側で比較的安定した層厚をもち、元堆積状況に復元すれば、北方向及び西方向に向けて層厚を増している。層厚は、薄いところで４cm（Ｂ11発掘区）、６～８cm（Ｂ６、Ｂ９、Ｂ10の各発掘区）、厚いところで44cm（Ｅ３発掘区）、比較的安定したところで26～28cmである。遺物は、この層の中～上位から出土した。



第5図　越路34線遺跡発掘区A－B、C－D断面

第３層　砂礫層

この層は、河川の堆積による砂礫層で、砂層と礫層が指状交差する。砂層の一部は砂壌土あるいは粘土層に移行し成層するところもある。礫層は一般に中礫であるが、分級のよい細礫の部分もある。この層中には、なんらかの条件で混入したと見られる遺物が、１、２みられたのみである。

３　遺構、遺物

今回、発掘した調査区域内では、遺構と認められるものは発見されなかった。ただ、Ｂ３、Ｂ４の各発掘区の第２層中から直径20～30㎝ほどの粘土塊が、各１個発見されたが、遺構に結びつくようなものではなかった。

遺物は、上より第１層の腐植土層と第２層の黄褐色土層から出土し、１～２の例外を除いて第３層からは出土しなかった。この例外は、なんらかの条件で第３層の砂礫層に混入したものと推定される。また、第１層中に包含されている遺物は、耕作によって第２層中のものが、削り取られ混入したものと推定される。

これらのことから、本遺跡で発見された遺物は、１つの土層中に含まれていたもので、その文化層も、１つのみで、２つ以上ではないと思われる。

本遺跡から出土した人工遺物は、量的には多くないが、上川町では始めて発見された土器であるので、その特徴等を述べていきたい。最初に土器、そして石器、次にその他の遺物の順で述べていくことにする。なお、発掘前に表面採取された遺物については、そのつど断わりを付して説明を加えることとする。

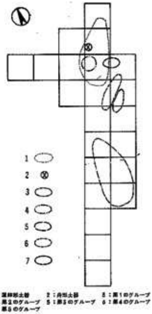
(1)　土　器

土器は、おもにＡ３、Ａ４、Ａ７、Ａ８、Ｂ２、Ｂ３の各発掘区から出土した（第６図）。先に述べたように本遺跡の調査では出土した遺物も少なく、土器については、群に分けるまでもないので、個々について説明を加えていきたい。

出土した土器が少ないわりには、２個の土器を復元することができた。復元できた土器は、深鉢形の土器が１個、舟形の土器が１個で、それぞれがＢ２、Ｂ３の発掘区から現地性をほぼ保って発見された。

このほか発見された土器片は、形や文様などから考えて、最大限でも５個で、それ以上にはならない。

これらの土器の編年上の位置づけについては、後章にゆずるとして、土器の形、文様などからみて、縄文時代晩期のものと類似している。とくに、常呂町栄浦第２遺跡の13号竪穴出土の土器群と非常に似ている。[註7]

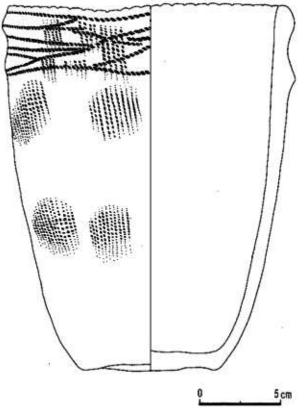


第６図　越路34線遺跡出土器の分布

深鉢形土器 (第7図)

この復元された深鉢形土器の大部分は、昭和51年5月に佐藤吉弘氏が、耕作中に発見したもので、この発掘のきっかけとなったものである。発見された場所は、B3の発掘区を中心としたところにあたっており、発掘のときも、このB3発掘区付近から出土している。

この深鉢形土器の大きさは、高さが22cmほどで、口径は平均17.5cm、底径は8cmほどである。土器の厚さは、0.7〜1.1cmである。口縁部は、全体的には直状であるが、口唇部がわずかに外反している。底部は、中心部分がわずかにとびだしているために、平面においた場合は、非常に安定が悪い。



第7図　越路84線遺跡出土深鉢形土器実測図

文様は、地文として斜行縄文がつかわれ、口唇部には器面に対して直角に約0.8cmの間隔で、縄の圧痕がつけられている。口縁部には、口唇に平行して縄の圧痕文が数条めぐらされている。また口縁部の周円上にほぼ等間隔で、4か所、縦に2個ずつ、径1〜1.5cmほどの貼付瘤文がつけられている。色調は、外面が茶褐色、内面が黒褐色である。土器の胎土には、砂粒を含み、焼成もやわらかく、吸湿性が大きい。土器の内側及び底付近には、炭化物質が多く付着している。

舟形土器 (第8図)

この土器は、B2の発掘区の第2層中から押しつぶされたような状況で発見された。土器片は、復元された舟形土器全体の約3分の2ほどで、舟形の舟首の部分がないため、全体の形は想像復元であるが、底部や器壁の立あがりなどから考えて、舟形の形態をとることは、ほぼまちがいないものと思う。

この舟形土器の大きさは、高さが約9cm、口径は長径が27〜28cmほどと想像され、短径（巾）が

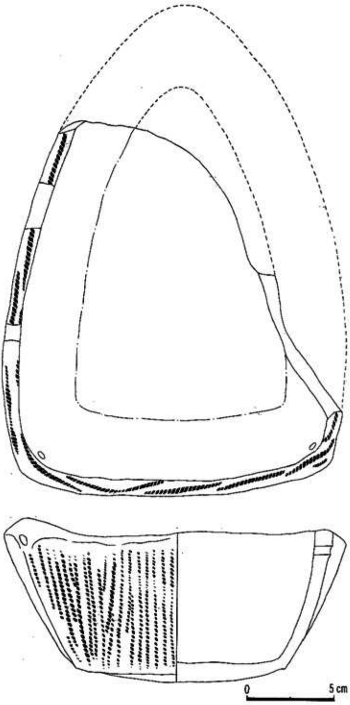
19cmで、底部は、長径が20cm、短径が12cmである。器壁は、底部から、ややふくらみをもちながら直状しており、口唇部は平縁となっている。

舟形の舟尾の両側、口唇から1cmほど下に直径0.6cmほどの孔が1個ずつあいている。

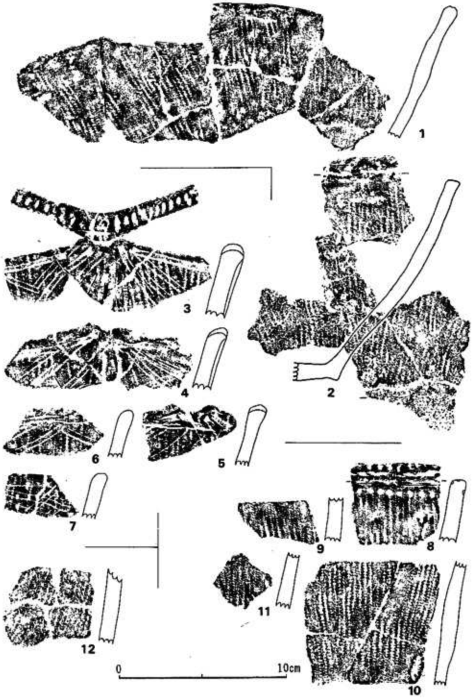
文様は、平縁の口唇上に、縄の圧痕文が横位につけられている。器壁は、細い縄を棒にら旋状にぐるぐる巻きつけたものをころがした撚糸文が縦方向につけられている。底の裏側には、斜行縄文が施こされている。

土器の色調は、茶褐色で、胎土には砂粒を含み、焼成はやわらかい。また吸湿性も大きい。

以上が、復元することが出来た土器である。このほかの土器片については、同じ個体と思われるものを、それぞれグループとして説明を加えていくこととする。



第8図　越路84線遺跡出土舟形土器実測図



第９図　越路８４線遺跡出土土器拓本

第1のグループは、第9図1、2で、図に示したもののほかに数十片の土器がある。これらの出土場所は、A7、A8が中心で、これに接するB6、B7、B8の発掘区から出土した。1の口縁部破片から推定すると口径は、18～19cmほどの大きさと思われる。高さは、12cmほどである。底径は8～9cmと推定される。器壁の厚さは、0.7～0.9cmで、底は厚い部で1.1cmである。2のとおりかろうじて口縁から底部まで接合することができた。この1、2から推測すると、この土器は浅鉢形の器形で、口縁は楕円形をとるかもしれない。文様は、口唇上に器壁に対して直角に縄の圧痕がみられ、その間隔はおよそ1cmである。器面には、斜行縄文が施こされている。土器の色調は、茶褐色で、底に近くなるとすこし黒味をおびてくる。胎土には砂粒を含み、焼成は堅く、吸湿性は小さい。土器の内側には炭化物質が多く付着している。

第2のグループは、第9図3～7のもので、B3の発掘区を中心に出土した。図に示した口縁の破片から推定すると、口縁は円形ではなく方形に近い形をとるものと思われる。この角に隆起帯がつけられており、その口唇がB状に隆起している。土器の厚さは、0.8～0.9cmである。文様は、前のもの同様、口唇上に縄の圧痕が0.5～0.6cm間隔につけられている。器面には、地文として縄文が施こされている。その上に口唇に平行にへら状の工具でつけた沈線がつき、さらに角の隆起帯から斜方向に沈線がみられる。口縁全体にジグザグの文様が横についているようである。土器の色調は黒灰色で、胎土に砂粒を含み、焼成は普通で、吸湿性は大きい。

第3のグループは、第9図8～11のもので、A4、A5の発掘区などから出土したものである。器壁は直状しており、深鉢形に近い器形をとる土器の破片と思われる。土器の厚さは、0.9cm前後である。口唇は、平縁で口唇上に横方向へと、口唇内側の角に縦方向へと撚糸圧痕文が施こされている。器面には縦方向に縄文が施こされ、口唇部の下に縄文原体の先でついた点列が、0.6cmほどの間隔でつけられている。

第4のグループは、第9図12の土器で、A4発掘区から出土した。土器の厚さは、0.9cmで、文様は、撚糸文が施こされている。この土器は、前に上げた舟形土器の一部分かもしれない。

第5のグループは、図に示めさなかったが、A3、B3の発掘区から出土したものである。この土器は、小形のもので、かなりの湾曲をもち、胴部の直径は約9cmほどと推定される。文様は、斜行縄文である。土器の色調は、黒褐色で、胎土に砂粒を含み、焼成はよい。

(2) 石 器

石器は、使用目的の明確なもの及び調整痕のある剝片についてみると、B2、B3、B4、B5C3、D3、E3の各発掘区からの出土が多かった（第10図左）。また、剝片の出土量についてみると、B4が75個で最も多く、B3、C3、D3の各発掘区の順となっている（第10図右）。

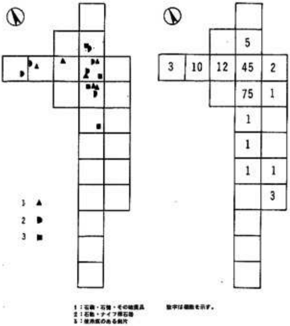
今回の調査では、石器の出土量はあまり多くはなかった。しかし、全体的な傾向はつかめると思う。石器を形態で分類すれば、石鏃、石槍、石匙がおもなものである。また、そのほかに調整痕のある剝片、石核などがある。石器及び剝片の石質は、ほとんどが黒曜石であるが、数個だけチャートのものがみられた。

石　鏃（第11図）

石鏃の完成品及びそれに近いものは、無茎で基部のえぐり込みが深い。しかしただ1つ無茎で基部のえぐり込みのないものがあった。石鏃の石質は、すべて黒曜石である。

1. 両面が調整されている。基部よりも胴部のふくらみが大きく、基部のえぐり込みは、0.85cmである。全長1.8cm×巾1.1cm×厚さ0.2cm（以下はこの順序で計測値を示す。単位はcmとする）である。出土場所はB3、第1層である。

2. 両面が調整されている。胴部はふくらみ、基部のえぐり込みは、0.85cmである。大きさは1.9×1.2×0.3、表面採集。



第10図　越路34線遺跡の石器布図（左）剝片分布図（右）

3. 2と同じ。基部のえぐり込みは、0.8cmである。大きさは1.5×（1.3）×0.2、表面採集。

4. 両面が調整されている。基部のえぐり込みはない。一部破損しており、現存部分の大きさは1.5×1.5×0.3、B3、第1層。

5. 剝片にほんのわずか調整を加えたもので、石鏃の未完成品と思われる。大きさは2.7×2.0×0.3、B3とB4から出土したものが接合された。

6. 7　石鏃の破損品

石　槍（第11図）

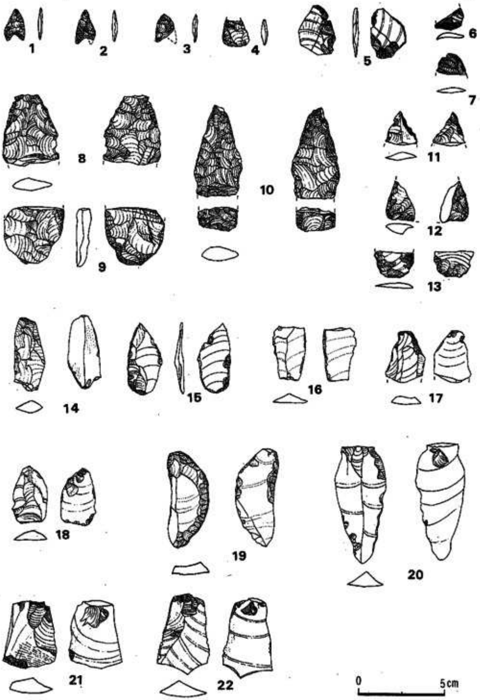
石槍は、やや身の厚い荒い両面調整のされたもので、形態は尖頭部が破損して不明なところもあるが、五角形あるいは柳葉形で、刃部は交互剝離のように波状の刃をつくり磨耗の跡を残す。基部の両脇にわずかなくびれが認められるのが特徴的である。石質はすべて黒曜石である。

8. 現存するのは、石槍の尖頭部で、荒い両面調整が施こされている。現存部分は4.1×3.3×0.9、表面採集。

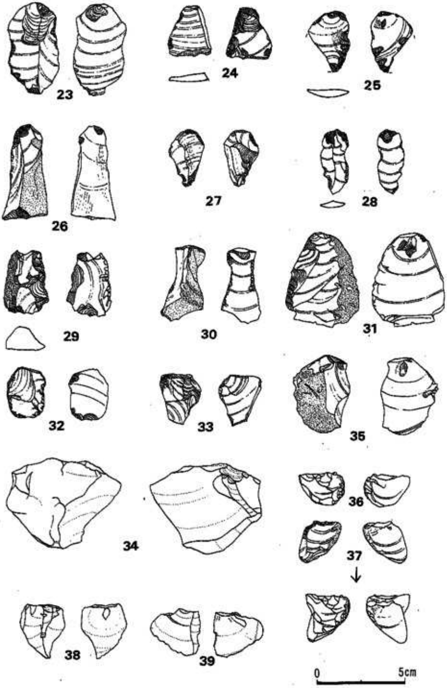
9. 現存するのは、石槍の基部で、両面が調整されており、基部の両脇がわずかにくびれが認められる。現存部分は3.2×3.4×1.0、D3、深さ40cm。

10. 欠損部分がほとんどない完成品である。両面調整が施され、刃部の磨耗は著しい。基部の両脇に明らかなくびれが認められる。大きさは、5.2×2.8×0.9、B4、深さ29cm。

11. 12. 13.　尖頭器の破損品と思われる。



第１１図　越路８４線遺跡出土石器実測図（Ⅰ）



第１２図　越路８４線遺跡出土石器実測図（Ⅱ）

図番号	発掘区	種類	形	石質	大きさ(cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
1	B 3	石鏃	二等辺三角形状	黒曜石	1.8	1.1	0.2	基部にえぐれ
2	—	〃	〃	〃	1.9	1.2	0.3	〃
3	—	〃	〃	〃	1.5	(1.3)	0.2	〃
4	B 3	〃	〃	〃	(1.5)	1.5	0.3	破損品
5	B3・B4	〃	不定形	〃	2.7	2.0	0.3	未完成品
6	B 3	〃	不明	〃	(1.6)	(1.1)	(0.3)	破損品
7	B 4	〃	〃	〃	(1.2)	(1.2)	(0.3)	〃
8	B 3	石槍	〃	〃	(3.2)	(3.4)	(1.0)	〃
9	—	〃	〃	〃	(4.1)	(3.3)	(0.9)	〃
10	B 4	〃	長五角形状	〃	(5.2)	2.8	0.9	基部にくびれ
11	B 4	尖頭器	不明	〃	(1.9)	(1.8)	(0.4)	破損品
12	C 3	〃	〃	〃	(2.2)	(1.6)	(0.6)	〃
13	—	〃	〃	〃	(1.4)	(2.2)	(0.3)	〃
14	B 4	石匙	縦形	チャート	4.2	1.8	0.8	
15	—	ナイフ状石器	〃	黒曜石	4.0	2.0	0.5	
16	D 3	石匙	〃	チャート	(3.0)	1.9	0.6	破損品
17	B 2	ナイフ状石器	〃	黒曜石	(3.0)	(2.1)	(0.5)	〃
18	B 3	〃	〃	〃	3.2	2.0	0.6	
19	E 3	石匙	〃	チャート	5.5	2.4	0.9	
20	B 4	ナイフ状石器	〃	黒曜石	6.6	3.0	1.1	
21	B 2	調整のある剝片	〃	〃	4.2	2.9	0.8	
22	B 3	〃	〃	〃	(4.6)	2.9	1.0	破損あり
23	A 7	〃	〃	〃	5.2	2.9	0.7	
24	B 2	〃	〃	〃	2.8	2.3	0.4	
25	B 4	〃	〃	〃	(3.3)	(2.6)	(0.5)	破損あり
26	B 3	〃	〃	〃	(5.3)	(2.6)	0.6	〃
27	B 4	〃	〃	〃	3.1	2.0	0.5	穿孔器状
28	—	〃	〃	〃	3.6	1.5	0.4	
29	B 5	〃	〃	〃	3.8	2.5	1.3	削器状
30	—	〃	〃	〃	(4.2)	(2.4)	1.0	破損あり
31	A 8	〃	〃	〃	(5.4)	4.2	1.3	〃
32	B 3	〃	〃	〃	(2.8)	2.2	0.3	〃
33	A 3	〃	〃	〃	2.9	2.5	0.5	使用擦痕あり
34	B 3	石核?	不定形．塊状	チャート	5.2	6.6	2.2	
35	D 6	剝片	不定形	黒曜石	4.4	3.3	1.3	
36	D 3	〃	〃	〃	1.8	2.5	0.6	)接合資料
37	D 3	〃	〃	〃	2.4	2.3	0.6	
38	C 2	〃	〃	チャート	3.0	2.6	0.6	
39	B 3	〃	〃	〃	2.7	2.9	0.5	

※ 発掘区の横棒線は表面採集のものである。大きさの数字のカッコは現存部分の数値を示す。

第2表　越路34線遺跡出土石器一覧

石　匙（第11図）

石匙は、縦型でつまみを有しない。稜を有する縦長の剝片に必要最少限の調整加工を施し、刃部としている。石質は、チャート及び黒曜石であるが、チャートのしめる割合が大きい。

14　両端に打点をもって表裏両面に一稜を有する縦長の剝片に細かい調整を施した縦型の石匙である。横断面が菱形のうえ細かい調整で鋭い刃部をもつ。石質は、チャートである。大きさは、4.2×1.8×0.8、B4、深さ30cm。

15　1稜を有する薄い縦長の剝片に表裏から細かい調整加工を加えたナイフ形の石匙である。大きさは、4.0×2.0×0.5、石質は黒曜石である。表面採集。

16　1稜を有する身の薄い縦型の石匙で、刃部に細かい調整加工が施されている。石質はチャートで、大きさは3.0×1.9×0.6である。D3、深さ20cm。

17　3稜をもつ縦型石匙の破損品である。基部につまみらしき加工がみられるが不十分なものである。石質は黒曜石で、大きさは現存部分3.0×2.1×0.5である。B2、深さ32cm。

18　2稜をもつ縦型の石匙で、細かい調整加工が施されている。石質は黒曜石で、大きさは3.2×2.0×0.6である。B3、第1層。

19　2稜を有する剝片を素材に調整加工を施した縦型の石匙である。刃部は半円形を成し細密な調整がなされている。石質はチャートで、大きさは5.5×2.4×0.9である。E3、深さ10cm。

20　1稜を有し断面が三角形である剝片にごく一部調整加工を施したナイフ形の石匙である。石質は黒曜石で、大きさは6.6×3.0×1.1である。B4、深さ25cm。

調整痕のある剝片（第11図・第12図）

これは、打面、打瘤を有する剝片の一部分にわずかな調整加工を施したもので、石匙と同様の目的に使用された可能性がある。第11図21・22、第12図23〜33および第2表を見ていただきたい。

剝　片（第12図34〜39）

剝片は、B4発掘区（第2層）、次いでB3、C3、D3の各発掘区から多く出土した（第10図）また剝片は、出土した石器総量の約半分を占める。細かく調べると剝片の中に黒曜石やチャートの原石面を有するものが多い。また接合できる剝片が2組見つかった（第12図36・37）。この接合資料はB4、D3の各発掘区から1組ずつ出土した。

第3表は、剝片の最大長で分けたものである。1のグループは、縦長の大型剝片と石核状剝片（第12図－34）である。2のグループは、石器を作る素材になりえて、わずかな調整加工を施すと石匙と同目的使用が

	最大長(cm)	個数	石　質
1	6.5〜7.5	2	黒曜石（1）、チャート（1）
2	4.0〜6.0	12	同　上（12）、
3	3.9以下	71	同　上（66）、同　上（5）
合　計		85	黒曜石（79）、チャート（6）

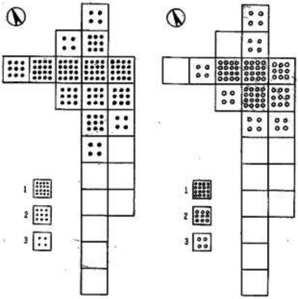
第3表　越路34線遺跡出土剝片の分類

可能である。3のグループは、石器の素材あるいは素材から石器を作る際にできる小さな剝片である。ただし、この表にはあまり細かな剝片を加えなかったことをことわっておく。

（3） その他の遺物

その他の遺物として、おもなものは、炭化木片（木炭）及び堅果、それから骨片及び貝殻片である。

その他の遺物の中で、炭化木片と骨片の分布は、だいたい一致している。その分布が密であるのは、B3を中心にA3、C3、D3、B4の各発掘区である。また、その出土層位は、多くが第2層であった。



第13図 越路34線遺跡出土炭化木片（左）骨片（右）の分布

1：非常に多い　2：多い
3：少ない

炭化木片及び堅果

炭化木片としたものは、完全に炭化しているもののほかに、木質部を残しているものもあった。炭化木片の大きさは、0.5〜1.5cmくらいで、それより細かいものでは無数に見られた。また炭化木片は、A3、B3、C3、D3、B4の各発掘区（第2層）で多く見られた。

堅果として、炭化したクルミの殻がB5、C3の各発掘区から出土した。

骨片及び貝殻片

骨片は、風化が著しくてもろくなり小さな粒状になり土中に散在していた。わずかに骨の組織を残しているものもあったが、何の骨であるか究明するに至らなかった。骨片の大きさは0.5〜0.9cmくらいで、細かいものでは無数に見られた。骨片は、B3を中心にA3、C3、D3の各発掘区（第2層）で多く見られた。

貝殻片1点が、D3発掘区の深さ27cmから出土した。

第5章　越路34線遺跡発掘調査のまとめ

越路34線遺跡について昭和52年度の調査から箇条書きにまとめると次の通りである。

1. 本遺跡は上川管内上川町字越路34線286番地、佐藤吉弘宅地内にある。遺跡は、石狩川支流エチャナンケップ川右岸の低位河成段丘上に位置する。
2. 耕作中に遺物が出てきた地点を中心に南北22m、東西10mの発掘区を設定し、そのうち十字形の部分約88m²を発掘調査した。
3. 本遺跡の層位は、上から第1層の腐植土、第2層の黄褐色土、第3層の砂礫層（含砂壌土、粘土）に分けられる。また本遺跡の文化層は第2層の中～上位と推定される。
4. 遺構と認められるものは、発見されなかった。
5. 遺物は、第1層と第2層から少量出土した。第1層に包含される遺物は、第2層から削り取られて混入したものと推定される。したがい本遺跡は、時代も文化層も1つで2つ以上認められない。
6. 土器は、深鉢形土器と舟形土器の各1個ずつが復元された。そのほかに5個くらいの土器の存在したことが確認された。

   土器の文様の特徴は、縄文または撚糸文を地文とし、口唇部に縄の圧痕文あるいは撚糸文が縦方向、横方向に施されている。また口縁部に数条の縄の圧痕文がめぐらされたり、2条1組の沈線文が施されているものもある。底部は、平底ないし弱揚底である。これらは、縄文時代晩期の土器に類似すると考える。
7. 石器の主要な構成は、無茎でえぐりの深い石鏃、基部の両脇にくびれのある石槍、縦型の石匙、調整痕のある剥片である。
8. 石器剥片中に黒曜石の原石面をもつものが相当量出土したほか、接合できる資料も2組あったことなどから、この場所で石器の製作が行なわれたと考えられる。
9. その他の遺物として、土器、石器出土量の多い地点と重なって、炭化木片と骨片が相当量認められた。
10. 遺跡は、発掘区の未調査部分及び発掘区の東方に広がっていると推定される。

第６章　越路34線遺跡の編年上の位置づけ

北海道で、人びとの活躍が始まったのは、今からおそよ２万年ほど前といわれています。当時、大陸と陸続きであった日本列島に人びとが、移り住むようになったと考えられています。その後、北海道で生活をしていた人たちが、土器を作ることをおぼえたのが、今から８千年ほど前ですから、上川町の日東で発見されています土器をともなわない石器は、それよりも古い時代のものといえます。北海道で生活をしてきた人びとは、このような長い歳月を厳しい自然と斗いながら、多くの経験を積み重ね、知恵を蓄積し、今日までの歴史を形づくってきたわけです。

私たちは、今回、越路34線の遺跡を調査し、前のページで報告したとおりの土器や石器を発見することができました。今回の調査で発見された土器や石器は、量的にはあまり多くなく、遺跡の規模も大きくないようです。また、住居のあととか、お墓のあとといった遺構も発掘した区域からは見いだすことはできませんでした。今後、周辺を調査することによって、もっと大きい遺跡に発展するかもしれません。しかし、今回の遺物分布範囲が、この遺跡の中心だとしますと、あまり長時間生活の拠点となっていたとは思えません。これらのことは、今後の調査をまつことにして、越路34線遺跡から発見された土器が、どのような時期のものかを考えています。

越路34線遺跡出土の土器は、深鉢形のものと舟形のものとが復元することができました。これらの土器に類似したものが、今日までどこかの遺跡で発見されていないかを調べてみた結果、報告でも述べたとおり、常呂郡常呂町栄浦第２遺跡、13号竪穴から出土した土器に似ているように思えます。[註8] また、釧路市幣舞遺跡で出土したヌサマイ式土器の範囲のな

		東北	道南	道央	道東
縄文時代	後期			堂林	TCP・V類
				御殿山	栗沢
	晩期			東三川 I	
		大洞B~BC	高野V類	寿都	
			上の国		
		大洞 C_1	札苅 I 群	東三川 II	
		大洞 C_2	札苅 II 群	虻田高砂	
		大洞 A	日の浜	タンネトーL	ヌサマイ
				ママチ	栄浦2・13号
					緑ケ岡
(弥生時代)			(続縄文時代)		

第４表　縄文時代晩期の編年表（宇田川洋氏編年）

かに含まれるものとも思えます。[註9]この栄浦第2遺跡の土器、ヌサマイ式の土器は、宇田川洋氏の「北海道の考古学」では、前のページの第4表のように編年されています。[註10]この編年表にみられるように、ヌサマイ、栄浦第2の両遺跡の土器は、縄文時代の最終末に位置づけられています。

幣舞遺跡を調査した沢四郎氏は、ヌサマイ式土器について、次のように述べています。[註11]

縄文晩期……終末期近くなると、釧路市幣舞遺跡で、最初に注目されたヌサマイ式土器が出現し、この流れを汲む土器は、……広い分布圏をみせ、北海道土着の土器の伝統を主張する。その器形は変化に富んでいる。深鉢、浅鉢、壺形、舟形、ピク形、注口土器などがある。大きさもさまざまである。深鉢系統の土器に大形品がみられる。底部は、平底というより少し丸底気味で出ばっていて、そのままの状態では立たず、不安定である。文様としては縄文がもっぱら多用されているが、縄文だけ単独に施される土器は、浅鉢、深鉢などの日常の煮沸用の土器に多い。普通は、縄文を地文とし、沈線文、縄線文、撚糸文などが施文されている。浅鉢の口唇には、突起などのある部分に渦巻く撚糸文を施文するくせがある。舟の形をしたいわゆる舟形土器は、縄文を地文とし、太目あるいは、細目の沈線を施し、真赤にベニガラの塗彩されたものが多い。深鉢や壺形土器の口頸部には、沈線文や撚糸文が横位に数条施されるものが比較的多くを占めるが、これが胴部に縦位にくねくねと波状を描いて施文される例がしばしば見受けられる。ヌサマイ式の沈線文は、丸味をおびた箆描き沈線というところに一つの特徴を見出せる。

以上、ヌサマイ式土器について引用が長くなりましたが、今回、調査した越路34線遺跡の場合はこれらのすべてを満足させるだけの土器をえることはできなかった。しかし、越路の土器は、栄浦第2遺跡の土器をも含めた広い意味でのヌサマイ式土器の範時に入れて間違いないものと思います。ただ、宇田川氏の編年もそうですが、ここまで比較してきた土器は、上川地方のものではなく、すべて北海道東部に位置する遺跡のものばかりです。これは、今日まで上川地方を中心にした編年が十分になされていないことによるものです。しかし、沢氏も述べているように、これらの土器は、広い分布をもっていますから、上川地方でも発見されています。年代幅は多少あるかもしれませんが、これらに近いものは、錦町遺跡をはじめ旭川市内の多くの遺跡で採集されていますし、[註12]鷹栖町嵐山遺跡、[註13]東川町幌倉沼遺跡、[註14]富良野市鳥沼遺跡[註15]などでも発見されています。

以上、述べてきましたように越路34線遺跡の土器は、縄文時代晩期の最終末に位置づけられると考えることができます。そこで、縄文時代後半の様相を大きな眼でみてみることにします。

縄文時代晩期の前半は、宇田川氏の編年をみてもわかるとおり、道東部では、どのような土器が存在していたのか、今日までの研究では、まだはっきりしていません。道南部・渡島半島は、東北地方と同じ形式の土器が、その分布を広げはじめています。次に晩期後半、終り近くなってから、前に上げたヌサマイ式に代表される土器が、道東・道北で、その分布を広げていくことになります。

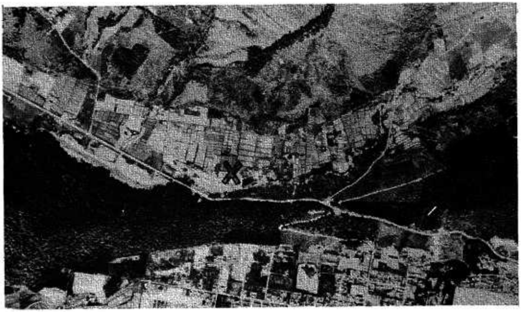
そして、東北地方・道南部が一つの文化圏を形づくり、石狩低地帯付近より道東・道北に一つの文化圏をつくるようになり、北海道は二つの大きな文化圏に分かれます。しかし、道南の尻岸内町日の浜遺跡から出土した日の浜式土器が、釧路市のヌサマイ式の土器を出す遺跡から出土するなど両文化圏の交流はあったようです。

北海道が、このような状況であった時期、北九州には、大陸からコメと金属器をもった新しい文化が日本列島に上陸し、弥生文化として東に、そして北に分布を広げていく時代にあたっています。すなわち、この越路の土器のころになると九州、近畿、関東、東北と順に、農耕を中心とした新しい弥生文化に変っていくわけです。しかし、北海道には、コメを基本とした農耕は、入ってくることがなく、縄文文化に続く、続縄文文化、擦文文化も漁撈、狩猟を基本とした社会が続き、その流れが、アイヌの人たちにうけつがれていくことになります。

引用文献および註

1. 河野広道・佐藤忠雄　江差牛（上川町江差牛遺跡発掘報告書）　安足間文化協会　1959
2. 都竹一衛　町域内の石器遺跡「日東遺跡」　上川町史　P165　1966
3. 都竹一衛　上川村の開拓　上川町史　P232〜　1966
4. 都竹一衛　町域内の石器遺跡「越路遺跡」　上川町史　P165　1966
5. 小泉秀雄　大雪山と石器時代　大雪山　P136〜364　大雪山調査会　1926
6. 都竹一衛　町域内の石器遺跡　上川町史　P161〜167　上川町　1966
7. 菊池徹夫・佐藤達夫　栄浦第2遺跡13号竪穴および付近の遺構（遺構、遺物）　常呂　東京大学文学部考古学研究室　1972
8. 前掲註7
9. 沢四郎・岡崎由夫　新釧路市史自然・先史編　新釧路市史1　1974
10. 宇田川洋　北海道の考古学2　P37　1977
11. 沢四郎・岡崎由夫　新釧路市史自然・先史編　新釧路市史1　P223〜224　1974
12. 斉藤傑　あさひかわの遺跡　旭川郷土博物館だより　№9〜23　1973〜1975
13. 斉藤傑他　嵐山遺跡　嵐山遺跡群調査会　1968
14. 佐藤忠雄　幌倉沼の墳墓1　東川町教育委員会　1966
15. 其田良雄　富良野市鳥沼遺跡　富良野市　1977

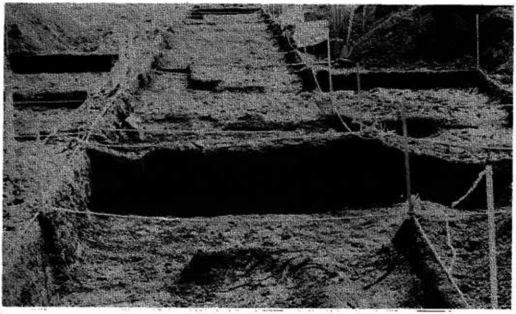
図　版



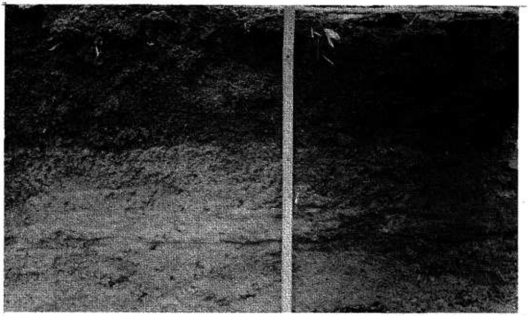
1） 越路34線遺跡付近の航空写真（×印は遺跡を示す）

2） 越路34線遺跡の遠景（越路峠から）

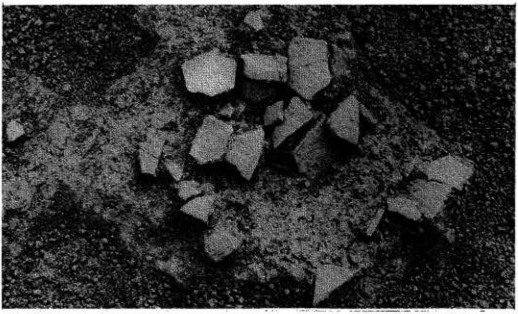
1）　越路34線遺跡発掘光景（B11区から）



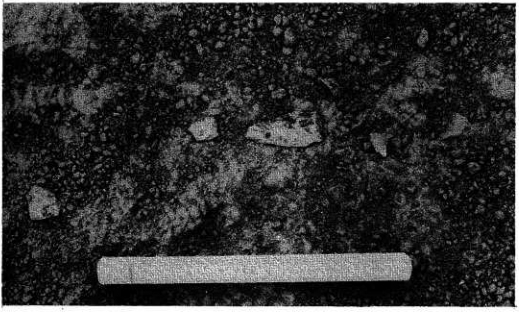
2）　越路34線遺跡トレンチ光景（B１区から）



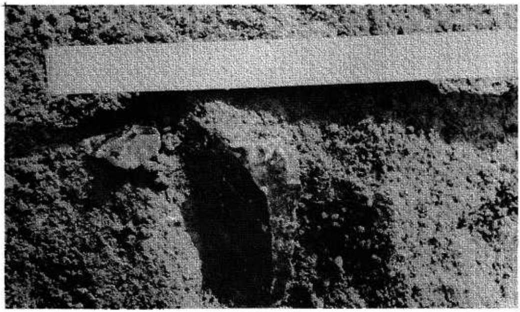
１）　越路34線遺跡土層断面（Ｃ３区）



２）　越路34線遺跡土器出土状況（Ｂ２区）



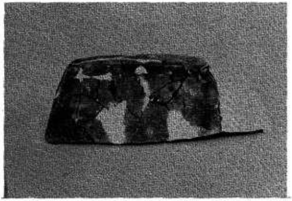
1）　越路34線遺跡石器出土状況（B４区）



2）　越路34線遺跡石器出土状況（B４区）

越路34線遺跡出土深鉢形土器

(内側)

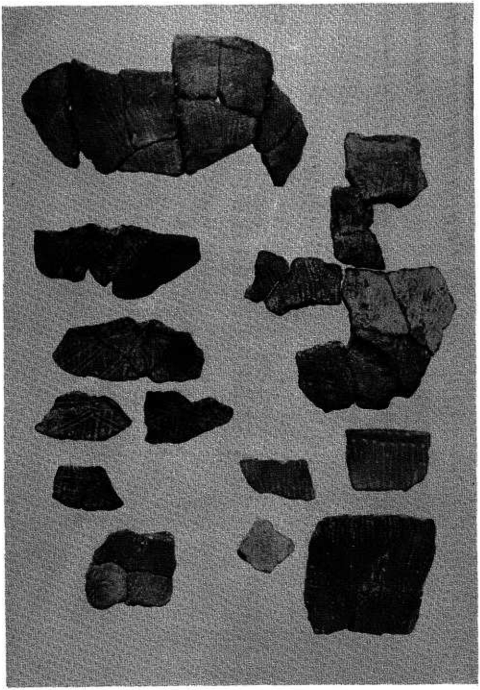


(側面)

(側面)

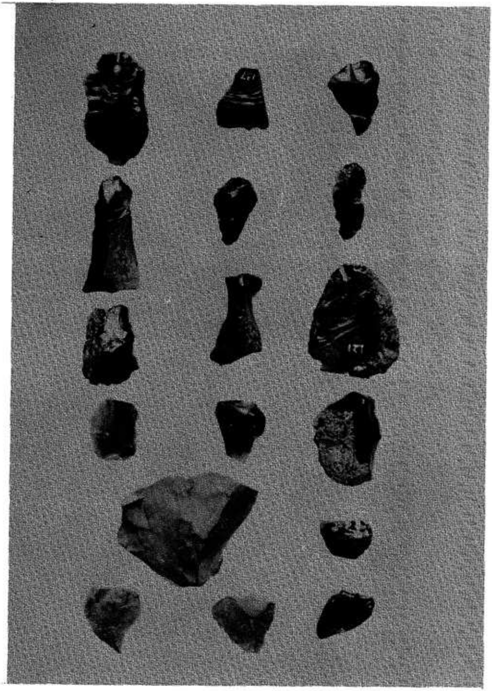
(底)

越路34線遺跡出土舟形土器

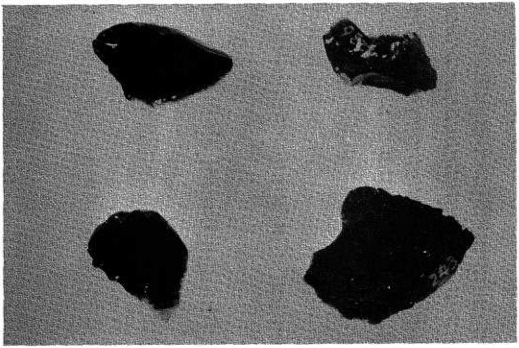


越路34線遺跡出土土器

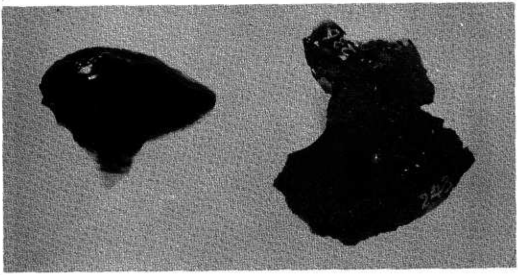
越路34線遺跡出土石器 I



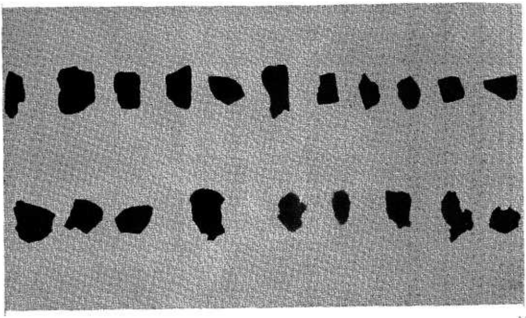
越路34線遺跡出土石器 I



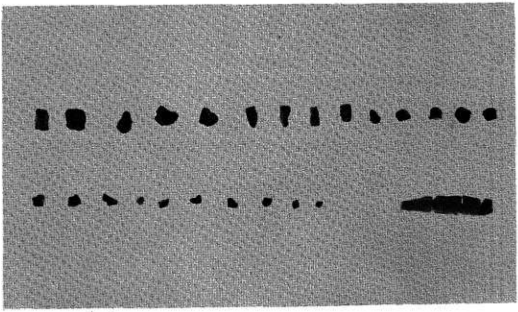
1）　接　合　前



2）　接　合　状　態
越路34線遺跡出土剝片接合資料



1） 越路34線遺跡出土炭化木片



2） 越路34線遺跡出土骨片

おわりに

本調査は、上川町内で最初に発見された土器文化をもつ遺跡の発掘調査である。調査参加者の多くは、発掘調査の経験に乏しく、初歩から学習を積み重ねながら調査を進めてきた。したがって調査全般にわたり未熟な部面が少なくない。しかし不十分ながら今回の調査記録を報告することができたのは幸いである。関係者の方々には、本報告をご一読され、ご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い致したい。

最後になってしまったが、今回の調査にあたり地主の佐藤吉弘氏のご理解とご協力に深く感謝申し上げる。同氏には、発掘中熱い味噌汁や馬鈴薯など厚い持て成しをいただいた。そんなことが、調査参加者を励まし立派な仕事をしなければ申し訳ないということで一同頑張った。

また、前上川町社会教育主事であった小西峰夫氏には、調査の諸準備から諸手続に携わり、その半ばで士別市に転任された訳であるが、同氏にも感謝の意を表わしたい。

調査が一応の成果を収めることができたのも、以上の方々をはじめ上川町内外の多くの方々のご協力があったからであり、ここに銘記して感謝申し上げる次第である。

昭和53年1月

上川町埋蔵文化財調査会

北海道上川郡上川町越路34線遺跡

昭和53年2月 20日印刷
昭和53年2月 20日発行

編　集　上川町埋蔵文化財調査会
発　行　上川町教育委員会
印　刷　旭川市　第一印刷